

第 51 回公共交通会議分科会議事録

日時：R7.8.26（火）10：00～12：00

場所：真庭市役所本庁舎 2 階大会議室（1）

出席：

- 【分科会長】 長田氏
- 【委 員】 清水氏、小野氏、小林氏、栃折氏、山本氏、眞柴氏、三谷氏、
- 【専 門 員】 宮地専門員氏、川島氏、矢田部専門員氏
- 【事 務 局】 八木公共交通対策室長、三船係長、妹島主任
- 【オブザーバ】 株式会社バイタルリード、まちづくり推進課、株式会社エイト日本技術開発

議 事

発言者	内 容
	開会
八木室長	説明定刻となったので、分科会を開催する。新任の委員がいるので、挨拶をお願いします。
小野委員	地域公共交通に対して勉強して、力になりたい。
長田分科会長	今回の分科会は、真庭市の地域公共交通のマスタープランにあたる計画策定にあたって現状を共有し、向こう 5 年間でめざす姿を考える上で、委員の皆さまそれぞれの立場から意見を頂きたい。
	協議事項①「計画概要と市内公共交通の現状」
三船係長	資料 1－11、14－19 頁を説明。
長田分科会長	皆さんの意見を頂きたい。
栃折委員	Q1 質問だが、12 ページに「人の動き（市内の移動）」とあり、13 ページには「人の動き（市外への移動）」とある。これは真庭市に住んでいる方が市外に出るという意味だと思うが、例えば新見市の大佐地区の方が真庭市に入ってくるような逆向きの移動はないのか。
八木室長	A1 岡山県のパーソントリップ調査のデータを基にしており、次の項目で詳しく説明する。真庭市への移動についてもデータを整理しているが、今回の資料では真庭市の居住者に限定している。

栃折委員	Q2 18 ページの「地域内交通の収支状況」について、チョイソコまにわはエリアスポンサーを募集する仕組みだが、資料にある財政負担額はエリアスポンサーの収入も含まれた上での金額か。
八木室長	A2 そのとおりである。エリアスポンサーの収入は赤字部分を補填する補助金となるため、エリアスポンサー収入と運賃を加味して、足りない金額を市が負担している。
小林委員	Q1 交通空白となっている地域の人は現在どのように移動しているのか。
八木室長	A1 家族の送迎等、公共交通のデータから見えない移動手段が多いと思われる。15 ページの図を見ると美甘・湯原・北房が空白となっているが、北房でチョイソコまにわと同様のデマンド交通の仕組みの実証運行を来年 1 月から計画している。図では幹線やまにわくんが走っている青色の個所から外れた所でも人口の集積がいくつか見られるが、新たなデマンド交通を構築することで、送迎に頼っている人や移動を我慢している人の移動利便性が大きく向上すると考えている。事務局としてはこのような形で移動の自由度を向上させたい。
小林委員	Q2 交通空白の解消は良いことだと思うが、財政負担が大きくなることを懸念しており、予算を抑えながら真庭市全体で公共交通の満足度を向上させることが課題である。運転者不足も大きな問題で、二種免許の取得や運転者確保も課題に挙げてもらいたい。
八木室長	A2 令和 5 年と令和 6 年のチョイソコまにわに係る経費は、コールセンターや AI 配車システムの運用等も影響し、全体で増加傾向にある。このような現状から、今後 10 年の収支見通しを考えていくために今年度対策室が発足している。人件費や燃料費の高騰を抑えることは難しいが、現在の右肩上がりに膨らんでいる財政出を横ばいできるよう目指していきたい。
小野委員	Q1 これから財政が厳しくなっていく中で利用者のニーズを把握して、それに合わせて最適なサービスを提供することが重要に思われる。利用者の声の聞き方が従来どおりのアンケートで良いのか疑問を感じている。住民のニーズ把握に対して、市の方針等あれば教えてもらいたい。
八木室長	A2 アンケート結果だけで全てが見通せるわけではないと認識している。一方、「まにこいん」の導入もあり、回答時にポイントを付与することでアンケートの回収が従来よりも容易になっている。また、まにわくんの運行日報等で利用者のデータを把握しており、まにわくんの枝線は 1 日 1 人程度しか利用が

	見られなかったが、チョイソコまにわの導入によって利用者が 2.5 倍程度増加した。これは移動の需要に応えることができた結果だと思っており、今後も利用実態に注視しながら公共交通の需要を把握したい。
小野委員	日報で実態を把握し、それに対して新たなサービスを導入することで利便性が高まったという話であったが、そのような事例を他地域に当てはめるときに良い効果を生むかをサービス導入前に把握することが難しいと感じている。本当に必要な地域に移動サービスを提供することが重要で、交通事業者としてもその手伝いをしていきたいと考えているので、引き続き情報提供をお願いしたい。
清水委員	Q1 中鉄北部バスでは岡山市と勝山をつなぐ路線を運行しており、岡山市へ向かう需要に対して対応する役割も担っていると思う。今後も連携ができれば良いと思うが、現在検討していることがあれば教えてもらいたい。
三船係長	A1 後ほど説明するが、勝山～岡山線は非常に重要な路線であると認識している。更なる連携の可能性もあると思われるので、今後とも一緒に検討をお願いしたい。
三谷委員	交通空白地帯である北房・美甘・湯原は、市内でも高齢化率が高い地域である。一方で、デマンド交通等の導入においては、その担い手が不足しており課題を感じている。介護保険の総合事業として訪問型 B のサービスを実施している地域が北房等で 2 か所あり、担い手が不足する地域で複数の移動のサービスがあることで、利用者の混乱を危惧している。高齢者はまにわくんやチョイソコよりも、家族に送迎を頼む方が移動しやすいが、使いやすさを前面にアピールできれば、より利用が増えるのではないかと思う。社会福祉協議会が支援している人は、予約をすることが難しく、これは運転免許証を返納した人も多く当てはまる。そのような実情を踏まえて、どのように工夫が必要か考えながら話を聞いていた。
矢田部専門員	昨年度まで 6 年間、市の公共交通を担当しており、チョイソコまにわの導入をはじめとした、利便性の高い公共交通の普及を進めていた。今年度からは市の福祉部門の担当となり、公共交通は高齢者や学生だけでなく障がい者の方にとっても重要な移動手段であると改めて認識している。障がい者支援施設を訪問した際には、通所時の移動が困難だという声が必ず出ており、場所が近ければ良いというものではなく、居心地の良さ等が福祉では非常に重要な要素で、福祉の視点では今まで見えていなかったニーズも多い。このことから福祉施策と交通施策の連携は必要不可欠だと考えている。
長田分科会長	民生委員として地域に広く関わる中で、真庭市は山間部が多く地形が入り組んでいるため、都市部と山間部を効率的に公共交通でカバーすることが困難で、

	地域共生社会の実現に向けては全ての移動を公共交通に頼るのではなく、自助・共助による移動も組み合わせていく必要があると考えている。 特に二川・中和・北房地域は中心部から離れており、デマンド交通を導入しようにも担い手が少なく、まにわくんの利用者も 1～2 人程度である。費用対効果を考えると長続きしないため、地域での協力が必要不可欠である。 市の財政負担増加に対しても、行政による一定の交通環境整備を基盤とし、対応困難な部分は地域で解決策を考える必要がある。東北や九州の限界集落を視察し課題解決の困難さは承知しているが、地域住民が自助・共助を進める意識を醸成しなければ地域づくりはできない。 市の公共交通はまにわくんを基軸とし、デマンド交通等で地域の移動を補完していく方向性だと思われるが、免許返納者の増加により今後は交通事業者や行政への負担が大きくなると予想される中、各地域が自分たちの地域の将来について話し合う時代が来たと感じている。
矢田部専門員	資料の 43 ページにある「地域住民の意識・意向」で、「多くの人が送迎に依存している」とあるが、先般 7 月に山陽新聞が開催した交通のシンポジウムでも同様の話があった。子供や高齢者等、多くの人送迎での移動に頼っている現状がある中、「送迎の依存」も今後のキーワードになると感じている。
八木室長	送迎の負担を抑えるため、往復から片道だけの送迎で済むような公共交通を構築していくことが必要だと考えている。そのような環境を整えた上で、自助・共助による移動手段等がサポートする形が理想である。
宮地専門員	県内の様々な自治体の会議に出席しており、真庭市の現状診断は県内で 1 番進んでいると感じた。潜在需要だけでなく将来の需要を予測することも重要な視点で、将来的な病院の統合・移転、学校の統廃合、商業施設の誘致等、人の移動に関わる出来事についても計画に取り入れてもらいたい。また、11 ページに「タクシー事業者の立地状況」があったが、タクシー事業者によって雇用している運転者や車両の数が違うため、サービス水準等は交通事業者の事業規模等も踏まえて検討してもらいたい。
川島委員	Q1 美甘・湯原地域等のデマンド交通が導入されていない地域から要望や期待感はあるのか。
三船係長	A1 チョイソコまにわ運行後、自分の地域にも便利な交通を導入してほしいという要望は存在するものの多くはない。直接の声は少ないが、潜在的に不満を聞いている人はいると思われるので、市としても問題意識を持っている。
川島委員	Q2 財政負担の抑制においては、利用の少ない路線縮小等も検討が必要では

	ないか。例えば、利用状況に応じて週 5 便のところを週 3 便にする等、次期地域公共交通計画で「見直し基準」のようなものは検討するのか。
八木室長	A2 直近は北房で計画している、新たなデマンド交通を導入等により利用者が好きな時間に移動できる環境が構築され、定時定路線で運行するまにわくんの幹線に依存しない移動手段が確保される。朝夕の便は学生の利用があるため維持が必要だが、日中の利用者が少ない便については新しい仕組みへの移行により減便が可能となり、財政負担軽減の効果も期待している。
川島委員	利用者数等の基準を設定し、「乗らないと便が減る」というメッセージを発信することで意識の醸成を図る方法もある。
小林委員	デマンド型交通の増加により各地域のタクシー需要減少を懸念している。車両や人員管理を交通事業者が連携して行う体制であれば、安全性の担保や事業者間の無用な対立を避けられるのではないかと。交通事業者との相談しながら進めてほしい。
バイタルリード	協議事項②③④「人流データの分析、まにわくんの利用状況の分析、広域公共交通とチョイソコまにわの分析」 資料 12、13、20－31 頁を説明。
栃折委員	Q1 24 ページの「民間路線バスの状況」で、中鉄北部バスの勝山・岡山線についてはコロナ禍による落ち込みがみられた後、急激に利用者数が回復しているように見受けられる。運行便数やダイヤが現状と変わらない中で、利用者がこれだけ増えるものなのか。
清水委員	A1 令和 5 年 12 月に岡山市の運賃割引施策・キャンペーンによる一時的な増加が大きく影響している。ただし、コロナ禍前の水準の約 95% 近くまで回復していることは確かであり、他路線と比較しても勝山・岡山線は人口減少が進む中で利用者を確保できている。
栃折委員	Q2 12 ページと 13 ページの市内外の移動について、%の値は、その地域の人口に対する比率と認識してよいのか。
バイタルリード	A2 その認識で問題ない。
栃折委員	Q3 久世の 58%と勝山の 57.4%は割合としては同じだが、人口規模が違うため需要の大きさは異なると思われる。

八木室長	A3 現時点では人口等は考慮した需要ではなく単純にパーソントリップ調査における回答者の割合を示している。潜在需要について 12 ページの北房地域を見てみると、北房から落合や久世に出る方にはオレンジ色の矢印となっているが、落合や久世から北房へ向かう方には青色の点線矢印となっており、移動の数が少ないことが分かる。チョイソコまにわを勝山・久世・落合を北房まで広げると、久世・落合から北房に行く需要が少ないため、北房に限定した新しい仕組みを作った方が良いとも判断できる。事業を構築するためにこのような移動のデータを活用したい。
宮地専門員	Q1 美甘から久米南町への移動が 6.5% で比較的割合が大きい、久米南町への移動について認識しているのか。
バイタルリード	A1 美甘についてはサンプル数が少なく、実数としては 2 件の移動が久米南に向かっている。細かい地域で見た際はサンプル数によって変動が大きくなる。
八木室長	サンプル数にも留意して様々なデータを活用していきたい。
宮地専門員	Q2 29 ページの鉄道との乗り継ぎについて、40 分近く待ち時間が発生する場合もあるが、その際の待ち方について把握しているのか。
八木室長	A2 待ち方に対する分析はできていない。一方、中国勝山駅で一部の便での待ち時間が長くなることは課題であるため、乗り継ぎ環境の整備は検討が必要だと考えている。
宮地専門員	待てる環境を作っていくというのは計画の中で非常に重要な視点である。今後の計画における目標や指標等への反映も検討してもらいたい。
小野委員	Q1 真庭市内における人の動きから潜在ニーズを分析し、事業施策を考える話があったが、潜在ニーズの掘り起こしは、それぞれの市が考えなければならない一方で、市と交通事業者の連携も必だと考えている。真庭市に住んで他市へ通学・通勤する人の移動利便性向上も、潜在ニーズへの対応として重要で、中鉄北部バスのコロナ後の利用者数回復は、ニーズを的確に捉えている状況と考える。このような点において行政との連携を検討しているか。必要性を認識していただけるのであれば、今後備北バスと真庭市でも協力できることがあると思う。
八木室長	A1 産業や観光等への影響も大きい、市外との交通ネットワークを維持していくことは非常に重要だと認識している。現在は JR 姫新線を団体で利用すると補助金を出す施策を行っており、沿線の市町による会議等でも課題

	を共有している。市内外の人をつなげる施策からその交通手段を積極的に利用して守っていく形まで展開できるよう、近隣市町と連携して考えていかなければならない。現状では情報交換から始めているところである。
小野委員	例えば通学に関して言うと、学校によって通学補助の有無・内容が様々で、市外へ通う学生に対して運賃補助等は、他の自治体と連携しなければ実現が難しいと思われる。まずは行政間の垣根をニーズに合わせて取っていくことが必要だと感じている。今後も相談しながら進めていきたい。
八木室長	市外通学に対する助成施策等は、それぞれの交通モードで利用者の奪い合いになってしまわないか危惧している。長期的な視点で慎重に考えていきたい。
小野委員	行政も交通事業者も人材不足が深刻化しており、ニーズ自体が消えてしまったら共倒れになってしまうと交通事業者の間では認識している。そのような事態にならないためにも出来る限りの協力をしていきたい。
矢田部専門員	JR 姫新線の勝山・津山間は利用が若干増加傾向で、津山市の高梁市の高校に通う生徒も多く、高梁市は市外から通学する生徒に対してバス定期券の半額を助成している。一方で、市内の 5 割近くの高校生が市外に通学している現状もあるため、今後の先行きを含めて慎重に検討していく必要がある。
小野委員	学生にとって通学時の費用は大きな問題で、地域連携による将来を考えていかなければならない。市内外で高校は沢山あるため、連携を図っていきたいが、真庭市だけに絞って考えると難しいと感じた。
長田分科会長	Q1 13 ページの「真庭市における人の動き」について、勝山や北房の一部は新見市、北房の中津井地域の人は高梁市、久世・落合は岡山市へ移動することもある。図を見るとそれらの方面への矢印が見えないが、対象外となっているのか。
バイタルリード	A1 新見市や鏡野町への移動も存在しているが、1%未満の件数が少ない移動については見やすさを考慮して、図の中では非表示にしている。
長田分科会長	津山市等の市外の民生児童員とも交流しているが、人の流れの考え方は資料に近いものがある。一方で、津山市の医療機関へのニーズは大きく、件数が少ない移動を除外しても良いものなのか。
栃折委員	岡山県のパーソントリップ調査については、落合・久世等の人口規模が多い地域の居住者サンプルが多く、地域によって偏りがあるのではないかと。地域住民の

	感覚と若干違う部分があると思うので、さらに需要を正確に把握する工夫をお願いしたい。JR 西日本としても潜在需要の把握に活用したいので、精度を高めてほしい。
八木室長	今回の資料はあくまで概略を示すもので、潜在需要については他のデータと合わせて複合的に考える必要がある。市で過去に調査した購買等のデータも踏まえ人流を把握していきたい。
長田分科会長	真庭市では、久世駅から鉄道で津山・岡山へ行くことを想定されているが、実際の動きとしては美咲町の亀甲駅まで車や送迎で行き、岡山方面の鉄道を利用する人が多いと思われる。
栃折委員	Q1 亀甲駅まではバスは運行していないのか。
長田分科会長	A1 バスは運行していない。地域によっては久世駅と亀甲駅までの到達時間が変わらないため、岡山市方面に通学する生徒は、亀甲駅まで送迎されているケースが多いと思う。
栃折委員	Q3 確かに、新幹線切符の購入者は、津山駅より亀甲駅が多い。どの地域の住民が亀甲駅まで行くのか。
真柴委員	A3 落合、久世、勝山地域の住民だと思われる。北房地域の住民は高梁市方面に向かうと思われる。
三船係長	協議事項⑤「市民アンケートの分析」・その他 資料 32－41 頁を説明。
矢田部専門員	Q1 JR 姫新線についてアンケート結果では「運行本数が少ない」と回答がある。JR 芸備線については、増便等の実証実験を行っている聞いており、状況を知りたい。
栃折委員	A1 JR 芸備線の実証事業については、新見市哲西地区の道の駅等、休日の交通手段の不足に対応するため、土日の休日に限定して 1 往復増便し、ダイヤに合わせた二次交通も整備している。増便は 1 往復分であるため JR 芸備線自体の利用者数は微増している。一方で、目的地まで乗り通す観光客等の利用が主となっており、二次交通への乗り換え利用が少ない現状である
長田分科会長	今後 10～15 年経つと、「限界集落」となる地域が増え、納税者が少なくな

	るため、公的負担で賄える力は弱くなると考えている。今後は自助・共生の社会の中で、自分たちで地域のことを考え、地域の関わり合いを持って移動手段を維持していかなければならない。公的負担を増やして移動を賄うだけではなく、地域の現状をよく把握し、地域住民自らが積極的に地域交通に関与して、今後の在り方や維持確保について考えてもらえるよう、行政から地域へのアプローチをお願いしたい。
小林委員	Q1 「日本版ライドシェアについて」に対する運転者としての参画意向に対するアンケート回答結果について、「してみたい」「少ししてみたい」と回答した方々が割と多いと思った。興味がある方の年齢層は分かるのか。
三船係長	A1 そのような視点も含めて引き続き分析したい。
矢田部専門員	Q1 岡山県内におけるライドシェアの状況を知りたい。
宮地専門員	A1 日本版ライドシェアについては、岡山県内で赤磐市と玉野市で取り組んでいる。赤磐市では、1日に7～8回くらい一般の運転者が稼働しているような状況で、地域によって需要も違う。仮に日本版ライドシェア導入を検討する場合、地域の交通事業者の減収等に繋がることがないよう、需要を見極めることが重要である。 また、「公共ライドシェア」とも呼ばれる自家用有償旅客運送について、真庭市ではまにわくんが該当しており、登録権限は岡山県、運行は市町村が主体となっているが、将来的に岡山県が運行主体として関わる形も交通政策審議会等で議論されている。背景として、行政圏ではなく市町村を跨いだ商業圏で生活している人も県内では多く、そのような地域の移動手段確保を考えるにあたって、都道府県や行政連合での検討・連携が必要な状況である。
真柴委員	「送迎依存の解消」が今後のキーワードになると思っている。子供が成長して公共交通を利用することになったときに、車での移動しか経験していないと将来困りことになる。子供の送迎は必要だが、親が少しでもまにわくんを利用してもらうよう子供に働きかけることも必要だと感じた。例えば、小学校の出前授業等で公共交通の乗り方を理解してもらえば、親も安心して利用させることができるので、結果として送迎の負担が減り、利用者も増えると思う。ポジティブに公共交通を利用してもらえるよう取組を検討してもらいたい。
宮地専門員	出前授業に関連して、岡山運輸支局では岡山市内の小学校の児童を対象に、バスの乗り方教室を実施している。今年は岡山市と連携して7つの小学校に実際のバスを持って行き、バスの仕組みや車内でのマナー、料金の支払い方

	法、交通安全等の授業を行っている。将来的な需要のために、子供の親からの働きかけの他、乗ってもらう環境を作っていくことも重要で、真庭市でも岡山市と同じようにその手伝いができると考えている。交通事業者の皆様にも協力いただきたい。
栃折委員	JR 西日本でも出前授業に取り組んでおり、真庭市で場所を設定してもらうことで対応できる。
長田分科会長	大人でも鉄道やバスの乗り方を理解できていない人がいると思う。
栃折委員	高齢者も、切符の買い方やワンマン列車の整理券システムが分からないことを理由に公共交通を使うことをためらう方が一定数いると思われる。JR 西日本では公民館や駅に集まってもらい鉄道の利用方法を説明する乗り方教室を実施している。この場で紹介したい。
川島委員	報道にもあるが、岡山県では燃料費高騰等で厳しい経営環境に置かれている交通事業者の支援を目的に、国の交付金を使った燃料価格高騰対策事業の実施を予定している。支援のスキーム等については、9月の定例議会での議決後に改めて各協会を等通じて案内したい。
長田分科会長	いろいろと貴重なご意見を頂き、ありがとうございました。真庭市の地域交通については、地域づくりとも連携して、地域の皆が関わっていく必要があると感じている。他の市町村からの関心も高いと聞いており、良い方向に実現できれば良いと思う。今後も協力をお願いしたい。
	閉会
長田分科会長 八木室長	以上で協議事項を終了する。事務局から何かあるか。 次回9月下旬から10月上旬に開催を予定している。引き続き協力いただきたい。以上で閉会する。